



特集 いのちをつなぐ



父と母から生まれた娘として、
愛される妻として、
子を授かった母として、
大切な友に囲まれた仲間として、
仕事を持つ社会のひとりとして。
いろんなところで輝いている
あなたの笑顔を守りたい。

ある患者の体験

病

気と無縁だった私にとって、乳がんは遠くにある存在でした。

あの日、そろそろ残業も終えようかと思っていた時間。たまたま脇の下に手をあてたときに感じた「こりっ」とした感触が乳がんであると断定されたのは、それから半年経ったころでした。

これからどんなことが起こるのか想像もつかず、正直に言うところ最初は他人事のような感覚でした。でも夫はショックを受けていたようです。「治療費はどうする？仕事は？子どもたちは？」

子どもには、はつきりしたことが判ってから説明しようと、最初は黙って通院しました。自分の母親が「がん」だと知り、「死んじゃうの？」と思わせたくなって、でも、子ども心に「何か変だ。なぜお父さんとお母さんは二人で通院するの。」という不安があったようです。あとになって娘が「両親が通院する姿を理由も判らずに見るのは不安だった」と号泣し、自分のことで精一杯で子どもの気持ちに気づいてあげられていなかったことに気づきました。

ごめんね。不安だったよね。ママ間違ってたね。これからはきちんと説明するね。

ご主人と一男一女のお子さんの4人家族で、自身も職をもつ女性。30歳代で乳がんを患った彼女が、ご自身の経験を話してくださいました。

それからは、抗がん剤を使用すれば副作用で髪の毛が抜けてしまうことも伝え、心の準備をさせました。暗い顔をしたって仕方がないので、一緒にかつらを見に行つては、どれが似合うかなんて話も楽しげにしました。

今は、一連の検査、手術、治療を終え、再発防止のためのホルモン治療に入っています。調子が良くない日もありますが、休んでいられないのも実際のところ。特に病前と変わらず接してくれる夫にも、それはそれで、「病人扱いしない優しさ」かなと思っています。

リンパ節にできた腫瘍だったため、マンモグラフィ検査では見つけ出すことができなかった私のがんは、何気なく触った自分の手で発見しました。

検診を受けることは当然大事ですが、早く見つけて、がんが小さいうちに策を講じるためには、セルフチェックも重要な意味を持っていると感じています。



写真はイメージ

医師の願い

下北地域の乳がん対策の最前線に立つむつ総合病院外科の山田医師にお話を伺いました。

アメリカでは8割以上の女性が乳がん検診を受診していて、「乳がんはかかりやすいけど、治りやすい病気」というのが欧米での考え方です。

一方日本では、乳がん検診の受診率は非常に低く、むつ市の受診率は県の統計で約2割程度。現在むつ市では年間約50人ほどの女性が新たに乳がんと診断されていますが、ステージ1の方は少なく、すでにステージ4に進行し、手術で治療することが難しい状態の方が1割ほどいます。

検診の機会をうまく活用して、早期に発見される状態が望ましいわけですから、私たちや行政は「いかに検診を受けやすい環境を作るか」その努力が必要になってきます。



むつ総合病院外科副部長
山田 恭吾 医師

そして男性のみなさんへ。大切な家族や仲間が「もし乳がんになったら」、あなたは何を考え、どう生きますか。乳がんは、男性にとっても決して無関係な病気ではありません。乳がんは早期に発見され、適切な治療が施されることにより90%以上は治ると言われています。

今号の広報むつが、ひとりでも多くの方に乳がんについて考えていただくきっかけになれば幸いです。

乳がんとは

乳房にできる悪性腫瘍。母乳を乳頭まで運ぶ役割を持つ「乳管」から発生することが多く、乳房の変化に気づかずに放置してしまうと、がん細胞が増殖し、リンパや血液の流れによって肺や肝臓、骨など他の臓器にまで及ぶ。

女性の罹患率が非常に高く、30歳代から増加し始め、50歳前後でピークを迎えるが、早期に発見され適切な治療を受けた場合は90%以上の方が完治する病気と言われる。

患者さんと接する中で、心に残っている方はたくさんいます。ステージ4の患者さんに標準治療を施しましたが再発。その後学会などで発表された新たな治療法と一緒に頑張り、予後が無いのではと思われた患者さんが社会復帰したときのことは忘れられません。ご自身やご家族が積極的に治療したいと言ってくださったので、一緒に闘っていったと思っています。

日本人にとって「がん」という診断は非常に怖いことなんでしょう。それが原因で検診すら受診しないということがあるのかもしれないが、早期に発見されれば治る病気です。

ぜひ、乳がんのことを意識して、検診を受けてください。